

Title	巻頭のことば
Author(s)	山口, 博
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume28, 2013.3 : 1-2
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4466
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

巻頭のことば

「いまからちょうど五世紀まえ、グーテンベルクが近代印刷術を発明したとき、書物の大量生産は潜在的可能性を獲得し、いまからちょうど一世紀まえ、世界のおもな文明国で義務教育制度が採用されたとき、書物の大量需要の潜在性が形成された。この二つの潜在性がはげしく現実化したのが現代である」。これは一九六二年に書かれた「中公新書刊行のことば」である。それから半世紀を経た現代の状況変化はすさまじい。紙によって記された「言葉」がコンピューターネットワークによって「いつでも、どこでも」情報として配信されるようになった。聖学院大学では今年度から教授会はペーパーレス化を目指し、各自のタブレット等の端末機で資料を繰るようになった。これもユビキタス (Ubiquitous) といわれるものだが、もともと「神の遍在」をあらわす宗教用語に由来している。一九八九年十一月十一日ベルリンの壁が崩壊し、東西冷戦が終結した年より軍用から商用へとネットワークが広まり始めた。便利な半面、パンドラの箱を開けたような危険も孕んでいる。いずれにしても今やあらゆる「言葉」がネット上を飛び交っているのがまさに現代の様相である。

*

西洋古代最大の教父アウグスティヌスは「言葉」を「記号」と考えたようである。そして「記号」には二種類あるとする。「自然的な記号」(signa naturalia) と「約束による記号」(signa data) である。さらに「言葉」は「見えない言葉」(signa invisibilia) と「見える言葉」(signa visibilia) に分類する。ネット上の「言葉」は後者といえよう。記号を組み立て人々にサインを送り続けている。しかし、それはどのように「意味する」(signify) こと

なのであろうか。

*

アウグスティヌスは『教師論』で「記号（言葉）によって学ばれるものは何ひとつない」と言う。「記号」が示されて「もの」の認識が起ころのでなく、「記号」が示している「もの」をすでに知っているときに「記号」の意味が分かるというのである。もしそうだとすると、ネット上に飛び交う言葉はどれだけの「意味」をわれわれに与えることができるのであろうか。ネット上の大量の記号（言葉）は、受け手の経験と知識の範囲内で独自に受け止めまとめられるだけである。そこで、「外なる認識」と「内なる認識」との関係が大切になる。理性を内から照らす「内なる光」が必要となるのである。

紙面であってもネット上であっても記された記号（言葉）は、内奥にあつて精神そのものを支配する真理自身に助けを受けるのでなければならぬことになる。アウグスティヌスによれば、外的な言葉によって教えられるのではなく、神によってわれわれの内奥に啓示されることによって明らかにされるもの（真理）自身から直接教えられるのである。

聖学院キリスト教センター所長
山口 博